

あい mamaさんから寄せられた体験談の1話目です。

あい mamaさんは現在快癒され、第2子をその後出産され、ブルーになることもなく子育て中です。

-----

23歳の春、私はお腹に赤ちゃんを授かりました。

喜びと不安と複雑な気持ちで、胸が高鳴ったのをよく覚えています。

その時私はまだ独身でした。でもその彼と結婚したい、2人の子供が欲しい、と思っていた矢先の妊娠でしたので、嬉しい気持ちの方が強かったように思います。

妊娠を告げた時、彼は最初「本当に??」と驚いた様子でしたが、当然のように「結婚しよう」と言ってくれました。両家の両親も反対することなく受け入れてくれ、本当に恵まれていたと思います。

仕事は妊娠8ヶ月頃まで続け、その後はマタニティスイミングに通ったりと

活発に過ごしていました。つわりで苦しい時期もありましたが、希望に満ちた

楽しい妊婦生活でした。「産後うつ」なんて言葉すら知りませんでしたし、まさか自分になるとは想像もありませんでした。

お産や子育ては大変・・・と聞かされてはいましたが、あまり不安にも思わず、どうにかなるだろうと楽観していたように思います。

予定日2日過ぎに破水して入院、微弱陣痛と言われ促進剤を点滴していました。母と姉が来てくれていたのに陣痛室には夫しか入れず、面会もあまり出来ない状態。強くなる陣痛に耐えながら、私は孤独を感じていました。助産師さんも腰をさすりに来てくれましたが、付きっきりというわけにはいかず。

そんな中時折医師の診察があり、これがとても恐ろしかった。苦しんでいるというのに励ましの言葉もなく「このくらいじゃまだ産まれないから！」と陣痛が来ていてもお構いなしの内診。子宮口が開くようにと刺激する処置・・・もう痛さと屈辱と何だかわけの分からない状態で、涙でひたすら耐えていたのを今も鮮明に覚えています。

陣痛室では他の妊婦さんの叫び声や呻き声が聞こえます。

それを聞き「みんな頑張ってるんだから！」と自分を励ましていました。

仕事中呼び出しては悪い・・・と旦那に遠慮していましたが、限界を感じ連絡して来てもらうことに。旦那の顔を見て少し安心したのも束の間、激しい陣痛にもうどうにでもなれと心はもう自暴自棄になっていました。

でもやっと分娩室へ行くことが許され「ああやっとこの痛みから解放されるん

だ・・・」と少し希望が見えた・・・もうその後は早く終わらせたい一心でひたすらいきみました。過呼吸で酸素マスクをしながら、意識が朦朧としている中、遠くで産声がしました。あれほど苦しんだのに、産んだ実感は・・・なかったです。

赤ちゃんを手渡されたものどうしていいのかわからず、感動もあまりなく、ただ無事産まれてよかったと安堵しました。と同時にすごく不安を覚えました。こんな小さな命を、私は育てていけるのだろうか。

(続く)